

世界遺産・平泉の輝く浄土 ～みちのくへ光を！～

2011年度FUJITSUファミリー会 秋季大会特別講演

盛岡大学文学部教授／平泉文化遺産センター館長 **大矢 邦宣 氏**

おおよくにのり／1944年岩手県生まれ。東京大学文学部史学科（東洋史学）卒業。東洋工業株式会社（現マツダ）、岩手県立博物館（首席専門学芸員兼学芸第一課長）勤務を経て、2005年盛岡大学文学部教授に就任。研究分野は、日本文化史、文化財学（宗教文化）、平泉文化。「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員、岩手史学会会長、岩手県文化財保護審議会会長など要職を歴任。『平泉 自然美の浄土』『奥州藤原氏五代』『平泉浄土早わかり』など著書多数。



世界遺産「平泉」の魅力

2011年6月に平泉は、「仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が評価され、「中尊寺」「毛越寺」「無量光院跡」「観自在王院跡」「金鶏山」の5つが登録資産となり、ユネスコ世界文化遺産に登録されました。なぜ、「浄土」とひとことで表現せず、「仏国土（浄土）」という表現にしたのか。実は、ここに平泉ならではの大きな意味があるのです。

「浄土」と聞いてまず思い浮かべるのは「極楽」、つまり「あの世」ではないでしょうか。しかし、平泉において、「浄土」とは「あの世」ではなく、「この世」のことなのです。

仏教は、その伝来過程において、さまざまな変化を遂げてきました。日本においては特にその解釈が多様で、浄土を極楽浄土と見る思想は、平安時代に「南無阿弥陀仏」を唱えれば、誰でも阿弥陀仏の極楽へ行けるとして大流行した浄土教などの流れが定着したものです。したがって、「浄土＝極楽浄土」という端的な解釈を避けるために、平泉における浄土の本来の意味である、現世における仏の国を表現するために「仏国土」をつけたのです。

また、今回高く評価されたのが庭園です。世界基準で見ると、人間がつくる造形は、四角形など人工的で幾何学的な形が一般的です。しかし、日本の造形美は、ゆるやかな曲線を描いた池などに代表されるように、あくまでも自然と調和した美しさです。毛越寺の「浄土庭園」は、日本の自然信仰と浄土信仰の見事な融合、まさに、現世の自然の中に浄土を表現したもののなのです。



日本人の宗教観が息づく地

著名な仏教学者でインド哲学者の故・中村元氏は、著書『東洋人の思惟方法』の中で、インドおよびその後仏教が伝播したチベット、中国、韓国、日本を比較し、日本人の最大の特徴を3つ挙げています。

第1の特徴は、日本人は、実際に今、目に見えるものが真実だと

思うこと。あたり前と思われるかもしれませんが、例えばインドでは釈迦が、すべてのものは刻々と変わっていくのが条理である。消え去るものにしがみつくことによって苦しみが始まるという教えを説きました。それに対して、日本人にとっては目の前に現れるものがすべてなのです。

さらに、仏教でいう輪廻の思想では、たとえ生まれ変わったとしても、次の世もまた人間であるかどうかはわかりません。しかし、日本人は生まれ変わっても、再びこの世に戻ってくると考えます。日本人にとって別の世界はないのです。楠木正成が後醍醐天皇に忠節を尽くして、七度生まれ変わって国に仕えるという誓いを残した「七生報国」の話にも、その思想が現れています。これが日本人の最大の特徴なのです。

第2の特徴は、身近な人間関係を重視すること。

そして、第3の特徴は、非合理的なこと。論理的に考えることはあまり得意ではなく、直感に従うということを挙げています。

このような現世主義の日本に仏教が伝来すると、その形もまったく変わってしまいます。お釈迦様の教えは諸行無常であり、苦しみから逃れるために煩惱を消す方法を説いたものですが、日本では、煩惱があるからこそ人間なのだ、そういう人間を救えずに、それが教えと言えるのかというように根本的に変わってくるのです。このように、日本の仏教の特色は、煩惱を肯定し、現実世界を肯定することです。この日本人の宗教観に最も合っていたのが「法華経」でした。



「絶対平等」を願った清衡

奥州藤原氏初代・清衡が都を築いた東北地方は、古くから「みちのく」と呼ばれていました。「みちのく」とは「道の奥」、つまり、「辺境」の意味です。この言葉からもわかるように、東北はもともと都から蔑視されていた土地でした。ところが、このみちのくには、豊富な砂金や名馬、弓矢に使う鷲の羽や鷹の羽、アザラシの毛皮など、都の人々が欲しくてたまらない特産物が数多くありました。蔑視している土地に、自分たちの欲しいものがふんだんにあ

る。するとそこには、当然のように略奪という行為が起こります。そして、利害関係の対立からゆくゆくは戦争を引き起こす。過酷な戦で親族すべてを失った清衡にとって、戦争のない平和な世界は悲願でした。

みちのくを都から守るために、清衡は3つの戦略を立てて実行しました。まず1つ目は、「政治戦略」です。国が分裂していれば、都からの介入を招いてしまう。自らがみちのくの中央に君臨し、東北を一つにすることが何よりも重要なことでした。そこで清衡は、平泉がみちのくの中央であることを広く知らしめるべく、東北地方の南の入口である北緯37度の福島県の白河の関と、北海道貿易の拠点である北緯41度の青森県の十三湊とさみなとに近い外が浜から、1町(109m)ごとに塔婆を立てていきました。南北から塔婆を数えて同じ番号になったところが東北の中央です。その小高い丘に一基の塔を建てました。それが、北緯39度、東北地方のちょうど真ん中に建立された「みちのくの中央の尊い寺」、すなわち「中尊寺」です。

2つ目は、「経済戦略」です。みちのくの特産物の独占です。都が求める品物を一元的に集めて、都への供給を図ったのです。

そして、3つ目は、「文化戦略」です。そのために、京の都の文化を貪欲に取り入れました。平泉には、いわゆる“みちのくらしさ”はありません。すべてが“都”の文化です。しかし、模倣するだけでは偏見や蔑視をなくすことは難しい。清衡は、その当時の先進国であった宋の文化をもモデルにして、京都以上の文化を目指したのです。

この文化戦略の最大の基盤となったものが法華経でした。仏教はもともと平等思想を説くものですが、その中でも、釈迦の教えの前には、都の人々もみちのくの人々も、山川草木、動物すべてが平等であるという「絶対平等」の教えを徹底しているのが法華経でした。都との平等性を主張することは、みちのくに対する差別や蔑視を払拭することです。法華経の教えは清衡にとって、理想郷を築く上でなくてはならないものでした。

世界遺産は、ユネスコ憲章の精神に則って制定されるものですが、憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とあります。さらに、それに続いて「無知と偏見と不平等が増幅されて戦争は始まる」という内容も記述されています。これは、無知や偏見、不平等によって多くの命が奪われたみちのくに、「絶対平和」の都を築こうとした清衡の浄土思想とぴたりと重なるのです。900年も前のみちのくに、すでにユネスコ憲章を実現しようとした文化が存在していたことは驚くべきことです。このようなことから私は、平泉は世界遺産になるべくしてなったと思うのです。



金色に包まれた謎

初代・清衡は今、平泉の中心を成す中尊寺の金色堂に眠っています。金色堂は、平安時代の仏教美術を代表する建築様式の阿弥陀堂ですが、その名のとおりに黄金に輝いています。遺体を安置す

る金箔で覆われた内陣をはじめ、金銀、螺鈿らでん、蒔絵、玉などの光り物ですべてが覆われています。まさに、びかびかです。何のためにここまで光らせる必要があったのか。これに関しては、実はまだはっきりとした解答が出ていないのです。しかし、清衡の生き方を考えてみると、権力者が金に飽かして豪華な建造物を造ったとは考えにくい。ここからは、私の推理も多分に働きますが、遺体の保存のためではないかと思われます。光るものが魔をはらうのは、万国共通の考えです。ご本尊の阿弥陀如来は、「無量光如来」とも呼ばれ、「計り知れない光を発する仏」の意味があります。その光が魔をはらい、遺体を守っているのです。

それでは、なぜ清衡の遺体を保存しなければならなかったのかという疑問が、次にわいてきます。その答えは、平泉の聖山「金鶏山」にあると思われます。発掘調査によりこの山から経文を納めた壺が見つかり、ここが「経塚」だったことがわかりました。さらに、年代鑑定により、その壺は初代・清衡が埋めたこと、初代に続き、2代・基衡もとひら、3代・秀衡ひでひらも経文を埋めていたこともわかったのです。

経文を埋めることは、「釈迦の入滅後、56億7000万年後に弥勒菩薩が現れ、多くの人々を救う」というシルクロードなどから伝えられた弥勒信仰から生まれたものと思われます。最初に行ったのは奈良吉野の金峯山に経筒を埋めた藤原道長ですが、彼は大変な失策をしてしまいました。遺言で、自身の遺体を火葬させてしまったのです。この世で復活するには、戻るべき体が必要です。さらに、極楽浄土に往生した人の遺体は腐らないという信仰もありました。光の力で遺体を守り、保存することは、このような思想からきているものではないかと思われます。「再びこの世に戻ってくる」という、清衡の現世への強い思いが伝わってきます。



みちのくへあまねく「光」を

清衡がこれほどまでに「復活」に強い思いをかけたのは、弥勒菩薩が再び仏としてこの世に下り、多くの人々を救うと言われているように、みちのくの人々をなんとか救いたいという、彼が終生抱いていた悲願からではないでしょうか。平泉は、ピラミッドや万里の長城、アンコール・ワットやタージ・マハルのように、一目で圧倒され、説明のいらぬ世界遺産とはまったく違います。なぜなら、すでに完成した「浄められた土地」(Pure Land)ではなく、これから「土地を浄める」(Purify Land)運動を表現した土地だからです。平泉の本当の価値は、世界遺産に登録されたこれからのこそ現れてくるのです。

3月11日の東日本大震災以来、私は三陸の復興事業にも関わっておりますが、私は東北の「復興」を、「復光」と呼びたいと思います。心の中に希望がなければ復興は始まりません。「希望の光」「浄土の光」「平泉の光」でみちのくを照らす。無量の光で東北を復活させることは、平泉の願いです。この「復光」を使うことにも、ぜひご賛同いただければ嬉しく思います。